「閔妃」試論
――図像をめぐる一考察

三谷憲正

一　はじめに

朝鮮王朝末期の「閔妃（ミンビ）」（現在は明成（ミョンソン）皇后（ファンフ）と呼ぶ）は、一八六六年に第二十六代高宗の妃となるが、その後舅である大院君と熾烈な権力闘争を展開し、やがて一八九五年（明治二八）、親露西亜に傾斜していくのを警戒した駐韓公使三浦梧郎を中心とした日本軍人や官憲、および民間人たちによって暗殺される……。王妃は韓国および日本を通じ、これまで多くの資料と作品の中で語られて来た。が、現在一般的に流布している「閔妃」の写真から喚起される〈像〉をもってして、それらの資料と作品を読んでいいのだろうか、という疑問がつきまとう。なぜなら、従来「閔妃」の写真、と言われて来たものは、実は別人のものである可能性が高いからである。本稿では、一九四五年以前には「閔妃」と言われる写真は〈なかった〉のではないか、という論証を通して、かつての文献に登場してくる「閔妃」に関しては、現在理解されている写真を基にそのイメージを作ることはできない、ということを述べてみたい。（本稿では歴史的な事象に鑑み、「閔妃」という呼称を用いたい。またハングル、朝鮮語、韓国語、等いくつかの名称があるが、ここでは「韓国語」を使用する。なお、日本語・韓国語文献双方に西暦とともに日本の元号も略記することにしたい。）

二　従来の「閔妃」像（1）　―文学的言説の中で

新聞、雑誌のみならず、他の資料において、これまでも数多く閔妃は登場していた。が、特に文学的な領域では、どのように表象されてきたのだろうか。

漱石は若かりし頃、正岡子規宛書簡（明治二八・一一・一三（水））

で「仰せの如く鉄管事件は大いに愉快に御座候小生近頃の出来事の内尤もありがたきは王妃の殺害と浜茂の拘引に御座候」（傍線引用者、以下同じ）と述べるが、後年「満韓ところどころ」の旅で、「閔妃墓（…）道路坦、稲田みのる。楊柳村、村の松、道白し。忽ちポプラー白壁。横を廻ると一面の芝原。中に二の堂。みす。後の陵土饅頭の二重。御影の玉垣。左右と後ろの松山。」「陶山さんが大院君の別荘と〔の〕石坡亭へつれて行くといふ。」（明治四二・一〇・五（火）関帝廟）と日記に記している。

また閔妃殺害への関与が取りざたされている与謝野鉄幹は、歌集『東西南北』（明治二九・七、明治書院）で「韓廷に、十月八日の変ありて、未だ二旬ならざるに、諸友多く、官にある者ハ、帰朝を命ぜられ、民間にある者ハ、退韓を命ぜらる。」とし、「京城に秋立つ日、槐園と共に賦す。時に、王妃閔氏の専横、日に加はり、日本党の勢力、頓に地に墜つ。」と朝鮮における日本の勢力の衰退を嘆いている。これは翌年刊行の『天地玄黄』（明治三〇・一、明治書院）でも同様であり、「明治廿九年十月八日、諸友と飲む。諸友みな、前年の十月に於て、朝鮮景福宮の変に遭逢せるもの。談、半島の近事に及ぶや、黯然とし泣下らざるなし。この夜、天陰る。」と、朝鮮半島の現実に悲憤をもらしている。

このような中で、閔妃の形象を造型しているものとして、事件から十年後に刊行された小杉未醒（放庵）の『陣中詩篇』（明治三八・一、嵩山房）に次のような一節がある。

春風三月城の東
閔妃の陵に柳ぞ青き
人無き昼を烏鳴き過ぎて
もの云はぬ石寂かなるかな
妖艶の眼の一たび笑めば
八道の民悉く哭き
細きやは手の一たび指せば
大臣の首自ら落つ
色魔の骨よ今いかにぞや
美人の魄よ何処に去りし
五更の嵐梢に騒ぎて
玉壺楼下に注ぎし血汐の
恨みの色の化すかとばかり
濃き紫の名も知らぬ花
塚のほとりの草に交るを
摘まんとすれば黒き小蛇ぞ
そもそも墓に穴や通へる
出づると見えて入ると覚えぬ

二行目の「閔妃の陵」とは先に触れた漱石の日記にも出てきたものである。また十二行目「玉壺楼」とは景福宮の最北、閔妃の寝室のあった建物のことであり、日本の官民に襲われ殺害されたという現場である。それはそれとしても、しかし、「妖艶の眼」や「細きやは手」、あるいは「美人」などという形容は一体どこから出てきたものなのか、と考えるよりはむしろ、十六行目の「黒き小蛇」が閔妃の暗喩（メタファ）と機能しているように、当時流通していた噂から発した類型的な表象[1]と捉えておけばいいものなのだろうか。

実際に暗殺に加わった民間人の一人、小早川秀雄の「閔后暗殺」（原題は「閔后殂落事件[2]」）は、閔妃の形姿に関して次のように叙述している。

> こうしているうちに、室内に倒れている婦人が、閔王妃だということが、誰れ言うとなく伝わった。予は室内にはいって、その倒れた婦人を見たが、この婦人はまだ寝床から出たばかりのところであったと見えて、上体には短い白の肌衣を着たばかり、腰から下は白のズボンをはきこんでいるが、膝から下は露わである。そして胸のあたりから両手の半分を露出して、仰向きのままはや息切れて倒れ、血潮があたりに流れている。よく見ると小柄な、やさがたな、色の白い、どう見ても二十五、六歳としか見えない女の、死んだというよりは、人形を倒したというかっこうで、美しく永久の眠りにはいっている。か弱い手で八道を動かし、群豪をあやつった閔后その人の遺骸だとは思われないほどである。雄魂逝って帰らず、室中一人の遺骸を守る者もなく、まことに凄惨きわまる光景であった。

この時、王妃は四十代であるはずだが、小早川は「二十五、六歳としか見えない」女性の印象を描いている。

このような点に関しては、三好徹の「閔妃殺害」（一九七〇（昭和45））・一一、『虚傑伝[3]』所収、中央公論社）が、暗示に富んだ指摘をしている。

> 閔王妃はこのとき四十三歳、岡本と同年であった。十六のときに選ばれて、入内した。国王よりも二歳年長であったが、彼女をもっとも強く推したのは、王太妃つまり国王の生母だった。／岡本は身分がら会うことはなかったが、美人であることがひろく伝わっていた。非常に頭のよい女性で、国王はほとんど彼女のいうなりになっている。はじめは親日であったが、日本の勢力をバックにした独立党が政権をにぎると、これを憎むようになった。というのは、独立党の朴泳孝が廃后を企てたからである。

「岡本」とは、実行犯の一人、岡本柳之助のことである。和歌山藩出身の彼は時の外務大臣陸奥宗光に近く、陸軍を退いたのちも朝鮮問題に深く関与していた、いわゆる大陸浪人の一人である。問題は次の一節である。

> 岡本がくれた「朝妝（ちょうそう）」は日本に持ち帰っていた。／ある日、源次の割腹死体が発見されたが、その横には「朝妝」があった。／事件を扱った警察は、絵が黒田清輝の筆になるものであると知ると、この絵を黒田にみせた。／黒田は首をかしげ、この絵は自分のものではない、といった。／黒田のいうには、たしかにこれは博覧会で問題になった絵と同図であるが、あの絵はモデルになった女性に依頼されて制作したものであり、当局の手にあるはずだというのである。／警察が人を送って調べると、果たしてその言葉のとおりであった。つまり、岡本が源次にあたえた絵は、偽画だったわけであるが、当の源次は、最後までそれを本物と信じていたのである。／ついでにいえば、閔妃のいまに残る写真と「朝妝」の絵のモデルは、さほど似ていない。

閔妃を描いたと思われる「朝妝」について、ここで語り手は「閔妃のいまに残る写真と『朝妝』の絵のモデルは、さほど似ていない」と気になることを指摘している。ここで言われている「いまに残る写真」とは現在流布しているもの、【図1】であるはずだ。

閔妃　1895年撮影

図1

また、角田房子氏は、『閔妃暗殺』（一九八八〔昭和63〕・一、新潮社）の中で、王妃となる日の閔妃を次のように叙述している。

> 王妃冊封の日の閔妃は、この国の女性の中でもただ一人使用を許される金糸縫いとりの丸い〝五爪竜補（オクワリョンポ）〟を、胸、両肩、背の四ヶ所につけたきらびやかな大礼服姿であったろう。瑞鳥として王妃の服装にしばしば用いられた雉の模様も、その布地に織りこまれていたかもしれない。／頭には、左右におおきく張り出したハート形のクンモリと呼ばれるかつらを高々とのせ、さらに王妃の権威を誇示する数々の飾りが用いられる。〝クンモリ〟は昔は人間の毛髪を香油で固めて作られたが、高宗の時代

には木製であったという。

三　従来の「閔妃」像（2）―図像資料の中で

これまで、多くの資料に閔妃の像として掲げられているのは、角田氏が描写しているように、「左右におおきく張り出したハート形のクンモリと呼ばれるかつら」姿の写真である。『日本大百科全書』19（一九八八〔昭和63〕・一、小学館）に掲載されている写真を例にとると次のようになる**【図1】**。

様々な文献に登場するこの写真は、いくらかの濃淡や拡大縮小は別としても、基本的には同一のものと考えられる。この写真を使った文献は枚挙にいとまがないが、先の『日本大百科全書』を含め、日本語文献としての例を挙げれば次のようになる。

○日本近代史研究会『写真・図説　総合日本史』第11巻―近代II
（一九五五〔昭和30〕・一一、国文社）
「閔妃（ビンキ）」

○日本近代史研究会『画報　日本近代の歴史―二〇世紀の開幕』
（一九七九〔昭和54〕・一一、三省堂）
「閔妃（1851～95）」

○市川正明編『日韓外交史料（5）―王妃殺害事件』
（一九八一〔昭和56〕・六、原書房、明治百年史叢書　No５）
「李王朝第26代高宗王妃明成皇后閔氏（1851―1895）」〔韓国王妃殺害事件解説の扉〕

○辛基秀編『映像が語る「日韓併合」史』
（一九八七〔昭和62〕・八、労働経済社）
「閔妃（1851―1895年）国王高宗の皇后」〔P13〕

○『日本大百科全書』19（一九八八〔昭和63〕・一、小学館）
「閔妃　一八九五年撮影」〔P895〕

○角田房子『閔妃暗殺―朝鮮王朝末期の国母』
（一九八八〔昭和63〕・一　新潮社）
「日本人写真師・村上天真撮影の閔妃と言われる写真」〔口絵〕

○『目でみる５００年　韓国の歴史』
（一九八八〔昭和63〕・八、翰林出版社）
「閔妃：廟号は明成皇后」

○金両基監修『図説　日韓の歴史』

（一九八八（昭和63）・九、河出書房新社）
「明成皇后（ミョンソン）（閔妃（ミンビ））」〔P109〕

○海野福寿『日清・日露戦争』
（一九九二（平成4）・一一、集英社）
「閔妃　国王高宗の妃」〔P89〕

○『1868～99　週刊　日録20世紀—明治という時代』
（一九九九（平成11）・三、講談社）
「閔妃殺害事件起こる（明治28年10月8日）」〔P38〕

この中で時代を感じさせる、資料的な価値を有する説明としては、昭和三〇年刊行の『写真・図説　総合日本史』であろう。

> 閔妃（ビンキ）　朝鮮李太王の妃。女ながらも政治に干与（ママ）し事大党をひきいて大院君一派をしりぞけ、諸閔派一族の政権を確立したが、のち一八九五年十月八日、景福宮で、大院君を擁立する日本党により殺害された。

「閔妃（ビンキ）」というかつての読み方や、また高宗を「朝鮮李太王」という旧植民地時代の呼称をそのまま使っている点、あるいは「女ながら政治に干与し」という所など、むしろ一時代の資料としてかえって価値があるように思われる写真の説明（キャプション）である。

　また、写真そのものに関して、注目されるのは、辛基秀氏の『映像が語る「日韓併合」史』での一節である。氏は次のように述べている。「ソウルの日本軍守備隊や公使館員らは、1895年10月7日の夜、王宮に侵入、婦人三名を殺害、閔妃をはづ（ママ）かしめ、松林で焼きはらった。この前代未聞の暴虐の行為で、日本のカメラマンが果した役割を看過できない。」と言い、その根拠として姜相圭氏の『韓國寫眞史』（一九七六（昭和51）・一二、圖書出版一心社）の一節を紹介している。そこには次のように記されている（私訳。以下、適宜施した日本語訳も同様である。原文は注を参照されたい）。

> 明成皇后　閔妃（図14）は早くから外戚としての精神を起こして、大院君に反旗を翻し、高宗に親政を宣布させ、大院君系列の人々を粛正しながら、日本と外交関係を結んだ。一八九二年甲午更張が始まるとロシアに接近し、日本の勢力の追放を計った。一八九五年一〇月八日（陰暦八月二〇日）は閔妃の政変の日であり、安達謙（ママ）、岡本柳之助が引率した幽徒隊が、閔妃の人物写真を皇室専属写真師から入手して、実際の顔と対照し、確認した後、閔妃を殺害したのであり、このときの皇室嘱託写真師は日本人の村上天真である。(4)

これによると、日本側はかなり以前から閔妃殺害を着々と計画し、顔写真まで手に入れていたことになる。

以上は日本語によるものであり、当然これは現在も日本国内で流通している文献である。では、韓国における文献ではどうなのだろうか。

実は韓国語文献に関しても事情は日本と同様であり、管見に入った限りでは、先に触れた姜相圭『韓國寫眞史』以外にも次のような資料がある。(漢字で表記されているものはそのまま掲出するが、韓国語で書かれている書名や出版社、あるいは写真のキャプションはカタカナで示す)[5]。

○『東亜　原色世界大百科事典』12
(一九八三〔昭和58〕・四、東亜出版社)
「生前の閔妃」〔P33〕

○元裕漢・尹炳奭『韓國史大系』7—朝鮮末期
(一九八四〔昭和59〕・九、サドソ出版アカデミー)
「明成皇后　閔妃」〔P243〕

○李弘稙編著『韓國史大事典』上
(一九九三〔平成5〕・三、教育圖書)
「閔妃が弑害された玉楼壺(左)・閔妃(右)」〔P569〕

○『ブリタニカ　世界大百科事典』7
(一九九三〔平成5〕・四、韓國ブリタニカ會社)
「明成皇后」〔P507〕

○歴史問題研究所『寫眞と絵で見る韓國の歴史』②
(一九九三〔平成5〕・四、ウンジン出版)
「明成皇后」〔P276〕

○『學園世界大百科事典』10
(一九九三〔平成5〕・六、學園出版公社)
「明成皇后」〔P526〕

○『社會科探求6—1』
(製作一九九一〔平成3〕・三、出版一九九六〔平成8〕・三。教育部。研究・梨花女子大學校　1種圖書研究開發委員會)
「明成皇后」〔P39〕

○『写真で見る　朝鮮時代　生活と風俗』

（一九九六〔平成8〕・六、サムンダン）
「閔妃　高宗の妃。16歳の時王妃となり、まもなく大院君の執政をしりぞけ、高宗の親政をなしとげたが、乙未事変の時、日本人の刺客に殺された。」〔P183〕

○イホンジク編著『國史大事典』
（一九九七〔平成9〕・九、民衆書館）
「閔妃が弑害された玉楼壺（左）・閔妃（右）」〔P491〕

○シンキュホ『韓國歴史人物事典』
（一九九八〔平成10〕・一〇、ソクピル）
「明成皇后閔氏」〔P161〕

できるだけ一般的な事典類を中心にあげてみた。が、中には小学校（初等學校）の六年生で副読本として使われていた『社會科探求6―1』などもある。ここでは『ブリタニカ世界大百科事典』7（一九九三）で掲げられている「明成皇后」の写真を取り出してみるとやはり次のようである【図2】。この他にも【図1】すなわち【図2】の写真を使った出版物[6]は多い。

いずれも、向かって左斜め後方に椅子の半分が見え、その椅子の右側に腰をかけ、頭にはクンモリというかつらを載せ、かんざしを

図2

見る側からすれば左から右へ刺している。手を前に置いてはいるが袖に隠れて見えない。足はというと、肩幅ほどの間を取り開いている。

四　同時代的な資料の中で（1）―欧文資料

これまで見てきたように、暗殺の被害者閔妃の写真に関しては、ほとんど定説に近い形で流通してきたように見える。

しかし、これを同時代的な資料の中に置くと、実に奇妙なことが生じてくることがわかる。先ず、L.H. Underwoodの『With Tommy Tompkins in Korea』[7]（London and Edinburgh : Fleming H. Revell Company, 1905〔明治38〕）の「Housekeeping」の章に挿入さ

れているのが【図3】の写真である（P292―P293）。
一見しただけで既に掲げた【図1】【図2】と何ら変わりはない。
しかし、不思議なのはそのキャプションである。そこには、

A KOREAN LADY IN FULL COSTUME

図3

A KOREAN LADY IN FULL COSTUME

と説明がなされているのである。なぜ「正装の韓国夫人」なのか。まさか、一国の王妃をごく一般的に「LADY」というはずはないであろう。しかも、著者のアンダーウッドは王妃付きのいわば侍医としてその傍にいた女性である。

また次のHomer B. Hulbertの『The Passing of Korea』[8]（London: W. Heinemann, 1906〔明治39〕）にも同様の写真【図4】が見てとれる。

A PALACE-WOMAN IN FULL REGALIA

図4

そしてここにも、そのキャプションは次のようになっている。

A PALACE-WOMAN IN FULL REGALIA

若干の語彙の違いはあるものの、ここでもやはり「正装の宮中の女」という説明がなされている。ハルバートは閔妃の夫高宗の政治顧問をしていた人物である。そうした人間が王妃の顔を知らないということがあっただろうか。夫高宗の背後で当時の朝鮮の政治を動かしていた、一国の最高実力者を「宮中の女」という語で表現するだろうか。

この点に関し、韓国の建国大学のシンポンニョン氏は、『東亜日

報』（二〇〇一〔平成13〕・七・七〔土〕）で、「ある人物に対する追慕の情はまずその形姿を描くところから始まる。特に観相と印象を重要視する韓国人たちが顔形を大変重要視することには少しも異常なことはない。ところで、その追慕の感情が度を越して、存在しない形姿を描いたり、想像が行き過ぎたりすると、それは追慕ではなく、むしろ故人を辱めることになる。その代表的な例が明成皇后の肖像をめぐる論争である。[9]」と前置きした上で、次のように述べている。

しかしこの写真は決して明成皇后の写真ではない。その理由は第一に、アンダーウッド女史やハルバート博士が一様にこれを王妃の写真であると言っていなかったという事実である。アンダーウッド女史はこの写真を指し「正装した貴夫人」だとし、ハルバート博士は「正装した宮女」だと説明した。高宗に近く仕えた顧問と皇后の御典医がちがうという、これよりさらに明白な証言はない。[10]

これはもっともな理由であると考えられる。本稿の最終的な論旨も、シンポンニョン氏が出した結論、すなわち「明成皇后の写真は存在しない」にやや近い。しかし、他の、韓国での先行研究に関してもそうなのだが、当時の日本語文献についてはほとんど目が向けられていない。この点に、考察の材料不足をきたしてはいないだろうか。本稿の趣旨は、この問題に関して今まで等閑に付されていたと思われる日本側の同時代的な資料を提示することにある、と言ってもよい。

五　同時代的な資料の中で（2）―日本語資料

今まで「閔妃」と言われてきた写真に対する疑いは、前節の欧文関係の資料のみならず、日本側の資料にも登場してきている。それは次のようなものである。

先ず『日露戦争 写真画報』（第一巻、一九〇四〔明治37〕・四・四、博文館）〔ノンブルなし〕には、次のような口絵【図5】が掲載されている。

写真の説明として、「韓国の文武官は両班と称し世襲の貴族として平民とは全く階級を異にす　由来走馬燈のごとく栄枯転変する政府の官人は総て此の社会の特有たり」は右側の男性像の「進士」についてのものである。が、「第三列　正服の進士　宮中の侍女」の「宮中の侍女」とは何であろうか。「第三列」とはこの頁の上から三段目に並んでいるということにしかすぎないが、問題はこの左側の女性の写真である。これは従来「閔妃」とされてきた女性ではなかったのか。

この写真は翌年の同じ『日露戦争 写真画報』（第二五巻、一九〇五〔明治38〕・六・二〇、博文館）〔P13〕にも登場する。この号は特

図 5

集であり「韓国写真帖」と銘打たれている。その中に次のような写真が挿入されている【図6】。これは「韓国事情」という記事の中にあり、見開き左頁ごとに中央にやや小さめの写真を嵌めこんでいく形で続いていくものである。最初は「文官の大服」、「武官の大礼服」、「武官の服装」等があり、「進士の服装」のあとにこの写真が掲載されている。

図 6

ここには、「宮中の女官」とある。その語義の範囲は前出の「侍女」とほぼ同様であろう。

『日露戦争 写真画報』は『日露戦争実記』の「定期増刊 第七編」として明治三七年（一九〇四）四月八日に発刊された。その後、毎月刊行されたが、明治三八年（一九〇五）一二月一八日、「満洲軍凱旋写真帖」（第四〇巻）、即ち『日露戦争実記』の「臨時増刊 第一〇九編」で一応の終刊を見ている雑誌である。誌面構成としては、一冊の半分がノンブルのない写真と絵によって埋まり、後半の戦況

の概説や紹介の文章は、写真や絵の説明といった意味合いが濃いものである。

次に出てくるのは、それから六年後、韓国併合がなされた翌年の出版物の中に、である。

『韓国併合紀念帖』[11]（一九一一〔明治44〕・六、啓文社）〔P84〕には、次の写真【図7】が掲載されている。この資料は「韓国併合」の詔書から始まり、朝鮮各地の地誌を叙述したあと、後半には明治天皇・皇后を先にし、続いて「李王殿下」とその妃、以前また退位を余儀なくさせられた「李太王殿下」（高宗）、さらには朝鮮王室の人々を配し、以下併合に力を尽くした伊藤博文などの顕官が並んでいる。そのはるか後の方の頁に、この写真が出てくるのである。

図7

ここのキャプションを見ると、

宮中ノ老官女
AN OLD WOMAN IN THE COREAN COURT

という説明がなされている。「老」(OLD) はこれまでになかった見方だが、基本的な認識は『日露戦争 写真画報』と同一であるといっていいように思われる。この『韓国併合紀念帖』は、前年の明治四三年（一九一〇）になされた「韓国併合」を「紀念」するという、現在の眼差しからは悲惨な著作と言わざるを得ない点は措くとして、同書中には「故閔妃の霊廟 THE ANCESTRAL HALL OF LATE BIN PRINCESS」という一葉が含まれている。つまり、この著作の編集をなした者は、閔妃に関して無自覚であったのではないということが見てとれる。

では一体これはどう考えるべきなのであろうか。一つの疑念として、かつての〈大日本帝国〉の資料であるから、そこにはある種の政治的な策謀があるのではないか、ということが考えられるかもしれない。一国の公使が暗殺事件を使嗾するような国の出版物であるのだから、その中に隣国の王妃を「侍女」「女官」「老官女」と貶めることがあったとしてもおかしくはない、と。しかし、もしそうであるならば、欧文資料で付されているキャプション、「A KOREAN LADY IN FULL COSTUME」、「A PALACE-WOMAN IN

FULL REGALIA」にはどのような〝政治的な陰謀〟があるのだろうか。

なお、この写真を「女官」とする資料は、戦後においても、次のように出てきている。

○『別冊一億人の昭和史―日本植民地史1　朝鮮』（一九七八〔昭和53〕・七、毎日新聞社）
「王朝時代の官女の正装」

○『目でみる李朝時代』（一九八六〔昭和61〕・三、国書刊行会）
「宮中の女官の正装」

いずれも「正装」というキャプションが付いている。これは、前掲のHulbert『The Passing of Korea』やUnderwood『With Tommy Tompkins in Korea』にあった「正装」「宮中」「夫人／女」といった語彙を暗示している。

六　先行研究より

ところで、日本では閔妃とされてきた写真は先の一枚だけであったが、韓国ではこれまでに何葉かの写真（ペン画を含む）が閔妃だと言われ、数々の論議が起こっている。その中の一つが本稿の「四」で触れた、シンポンニョン氏の『東亜日報』での記事であった。それも含めて整理すれば、次のような議論[12]が新聞紙上をにぎわせている。

○『朝鮮日報』（一九九四〔平成6〕・八・二三（日））　無署名
明成皇后を弑害したと推定される刃物　発見
日本の九州で　犯行自白の文書も

○『朝鮮日報』（一九九五〔平成7〕・五・一〇（日））　無署名
明成皇后の弑害　目撃記録　公開
当時宮内に居住のロシア人　一万行にわたり詳細に記述

○『朝鮮日報』（一九九七〔平成9〕・一一・一二（水））　無署名
明成皇后の写真攻防
髪の様子から見るとき　皇后に間違いない

○『朝鮮日報』（一九九七〔平成9〕・一一・一九（水））
〈前宮中遺物展示館長〉
明成皇后写真論難〝写真の中の女人　皇后の服式ではない〟

○『朝鮮日報』（一九九八〔平成10〕・二・九（月））

〈イハンウ記者〉
明成皇后写真論争〝その是非の端緒　みつかった〟
19世紀末ガードナーの著書『朝鮮』で宮女の挿画発見

○『朝鮮日報』（一九九八〔平成10〕・八・一三〔木〕）
〈イチュンホ記者〉
明成皇后論乱　写真の中の女人は無名の〝天主教信者〟？
〝女性教会員〟と説明　フランスの資料発掘…
新仮説提起

○『東亜日報』（二〇〇一〔平成13〕・八・一二）
〈キムスギョン〉
明成皇后　この容貌が　本当の顔？
キムスンヒ前建国大教授　公開
〝1898年　フランス言論人の本に掲載〟いっしょに載っている大院君―高宗の顔　実際の写真と完全に一致

○『東亜日報』（二〇〇一〔平成13〕・七・七〔土〕）
〈シンポンニョン〉
明成皇后の写真は存在しない
大院君と命かけた争いで、近親でないならば、会わない
当時〝写真を撮らせると、魂が抜ける〟と認識　カメラ忌避
証言者たち〝優雅で、眼差し澄んで〟…教科書中の人物は宮女

これらの議論を概観すると、日本とは異なり、韓国において如何に閔妃（明成皇后）への関心が高くまた熱いか、ということがうなずける。しかし同時に、実際不思議ではあるが、前節で挙げた閔妃に関する日本側の資料は全く使われて来なかったことも理解される。

本稿では、現在少なくとも日本では定説となっている「閔妃と言われている写真」が本人ではない、という点に論証の力点を置いている。そのためVilletard de Laguérie の『La Corée』―indépendante, Russe, ou Japonaise.（Paris : L. Hachette, 1898〔明治31〕）で舅大院君、夫高宗とともに表紙を飾っているペン画の上半身像、あるいはCarlo Rossettiの『Corea e Coreani』中の写真、また李承晩の『獨立精神』（一九一〇）中の娘姿の写真に関しての議論は、別の場所を用意して行いたいと考えている。

しかし、わずかに立ち入るとすれば、ここに日本での資料を入れるとどうなるのか、についていくつかのことが考えられる。

シンポンニョン氏は、定説化していた、L.H.Underwoodの『With Tommy Tompkins in Korea』（1905〔明治38〕）の中の写真、それは同時にHomer B. Hulbert『The Passing of Korea』（1906〔明治39〕）で使われている写真でもあるが、それを彼らが間違える

はずがないという現実的な論拠で否定した。その点は大変貴重だと思われる。がしかし、今まで閔妃だと言われてきたこの写真は、Carlo Rossettiの『Corea e Coreani』(1904〈明治37〉)に掲載されている写真【図8】から人物だけを切り取り合成したものだ、[13]という推測はどうであろうか。

図8

ちなみに、ここについているイタリア語のキャプション「UNA DAMA DI PALAZZO IN ABITO DI CORTE」は「宮廷の服を着た宮殿の貴婦人」というものであり、同一人物と思われるこの女性が「宮廷の女官」という点では、これまでに見てきた写真と同様である。それはそれとしても、Carlo Rossettiの『Corea e Coreani』は一九〇四年の出版だった。その同じ年、つまり一九〇四年の四月には、先に見たように既に日本の雑誌『日露戦争 写真画報』(第一巻)に登場していることはどう考えるべきなのであろうか。つまり、一年後二年後に改竄されて登場するはずの写真が、同じ年に日本の雑誌に掲載されていることの意味である。おそらく「合成」ということはありえなかったのではなかろうか。

また、『朝鮮日報』(一九九七〈平成9〉・一一・一二〈水〉)で「明成皇后の写真攻防/髪の様子から見るとき/皇后に間違いない」は、頭に着ける「クンモリ」をめぐっての議論であるが、もしこれが王妃を表示するものだとすると、次の絵の女性の髪型はどのように判断したらいいのであろうか。

これは、『日露戦争 写真画報』第二巻(一九〇四〈明治37〉・五・八)に掲載されている、中澤弘光の筆になる絵である。【図9】題は「韓国皇宮の炎上」、説明としては「四月十四日の夜韓国皇宮火を失し、全宮総て烏有に帰す、大安門は皇宮の正門、我兵入て護衛す」とある。ここで画面の右手前、門から逃げてきた女性の頭に注目してみると、これはまさに「クンモリ」ではないだろうか。もし、従来の写真が閔妃だとして、その髪型の様子からして王妃だとすれば、この女性も王妃ということになる。しかし、当の王妃は既に十年前の明治二八年、日本人の暗殺によりこの世を去っていたのではなかったか。むろん、もともと、王妃を貶める〝日本の謀略〟という観点からは、振り出しに戻ってしまうのは確かではあるが、しかし今後論議を深める上で、材料の一つにならないとも限らないであろう。

韓國皇宮の炎上

CONFLAGRATION IN THE IMPERIAL PALACE OF KOREA.

四月十四日の夜韓國皇宮火を失し、全宮總て烏有に歸す、大安門は皇宮の正門、我兵入て護衛す。

（中澤弘光筆）

図9

七　おわりに

以上の点を簡単にまとめると、これまで流布してきた「閔妃の写真」と言われるものは、もともと、「宮中の女官」あるいはそれに準ずる女性を撮ったものだったのではないか、と推測できる。実際不思議なことではあるが、戦前の「閔妃」に言及している多くの資料に「閔妃」の写真は出て来ない。例えば、細井肇の『女王閔妃』(14)（一九三一〈昭和6〉・三、月旦社）などは、朝鮮総督府の資料を自由に使い書き上げたものではあるが、閔妃に関しては、その筆跡しか口絵写真に用いていない。つまり、一九四五〈昭和20〉年までは「閔妃」とする写真は少なくとも日本においては〈なかった〉と言ってよい。

したがって、戦前までの文学作品を含む文献に登場してくる「閔妃」に関しては、現在流布している〝閔妃の写真〟を基に〈現在の視点〉からそのイメージを喚起することはできない、ということが言えるのではなかろうか。

付記

この研究は、二〇〇〇年度日本近代文学会秋季大会（一〇月二一日、於 実践女子大）で発表したものが基礎となっている。その後新たに調査して明らかになった資料を補い、「第2回 国際日本文化研究センター 在住・在日外国籍研究者によるシンポジウム―『コリアにおける日本研究の現在』」（二〇〇一・二・一〇、於 国際日本文化研究センター）において、その後の考察を含めて問題の提起を行った。その際、日本国内並びに韓国在住の研究者より、いくつかの教示をたまわった。その後も、ソウル市立大学校の鄭在貞教授のお陰で、Carlo Rossetti『Corea e Coreani』の該当個所のコピーを入手することができた。最後になったがこの研究は、勤務校である佛教大学の平成一二年度の特別研究助成によって調査した成果である。

注

(1) 細井肇『女王閔妃』（昭和6）にも同様の比喩が使われている。「王妃は蛇のやうに慧く、身をひるがへして着替へのために別房へ急ぐのでした。」（【二二】節）

(2) 小早川秀雄「閔后殂落事件」は、謄写版刷りで数十部、世に出された資料であるが、現在は、近代未刊史料叢書（第5巻）『近代外交回顧録』（ゆまに書房）に収録されている。文学的表象という趣旨から、引用は『世界ノンフィクション全集』37（一九六二〈昭和37〉・一二）によった。

(3) 初出は、一九六九〈昭和45〉年夏季号『別冊文藝春秋』。

(4) 明成皇后 閔妃（圖 14）는 일찌기 외척 정신을 수립하여 大院君에게 반기를 들었고 高宗에게、親政을 선포케 하고 大院君계열의 인사들 숙청하였으며、일본과 외교 관계를 맺었다・18

92년 甲午更張이 시작되자 러시아에 접근하여 일본 세력의 추방을 기도했다. 1895년 10월8일 (음력8월20일) 은 민비의 정변일인데 安達謙(ママ) 岡本柳之助가 인솔한 幽徒隊가 민비의 人物寫眞을 황실 전속 사진사로 부터 입수하여 실제 얼굴과 대조 확인한 후 閔妃를 弑害한 것이며 이때 皇室 囑託寫眞師는 日本人 村上天眞이다.

(5) 原題は以下のとおりである。

○元裕漢・尹炳奭『韓國史大系』7—朝鮮末期
(一九八四・九、사도서출판 아카데미)
「明成皇后 閔妃」(P243)

○李弘稙編著『韓國史大事典』上
(一九九三〔平成5〕・三、教育圖書)
「민비가 시해당한 옥호루 (左)・민비 (右)」(P569)

○『브리태니커 세계 대백과사전』7
(一九九三〔平成5〕・四、한국브리태니커회사)
「명성황후」(P507)

○역사문제연구소『사진과 그림으로 보는 한국의 역사』②
(一九九三〔平成5〕・四、웅진출판)
「명성황후」(P276)

○『학원세계대백과사전』10
(一九九三〔平成5〕・六、학원출판공사)
「명성황후」(P526)

○『사회과 탐구 6—1』
(지음一九九一〔平成3〕・三、펴냄一九九六〔平成8〕・三。교육부 연구한이 이화여자대학교 1종도서연구개발위원회)
「명성황후」(P39)

○『사진으로 보는 朝鮮時代 생활과 풍속』
(一九九六〔平成8〕・六、서문당)
○「민비 (閔妃) 고종의 비. 16세 때 왕비가 되어 이윽고 대원군의 집정을 물리치고 고종의 친정 (親政) 을 이룩했으나 을미사변 때 일인 (日人) 자객에게 피살되었다.」(P183)

○이홍직編著『國史大事典』(一九九七〔平成9〕・九、民衆書館)
「민비가 시해당한 옥호루 (左)・민비 (右)」(P491)

○신규호『한국역사인물사전』(一九九八〔平成10〕・一〇、석필)
「명성황후민씨 (明成皇后閔氏)」(P161)

(6) 例えば、鄭飛石氏の『소설 명성황후』1・2 (一九八七〔昭和62〕・一、고려원) で使われている「表紙」や、역사신문편찬위원회『역사신문—신문으로 엮은 한국역사5』(一九九六〔平成8〕・一二、사계절출판사) の「명성황후를 시해한 뒤 불태워 인간 이하의 만행」(P59) の記事などに散見できる。

(7) 『With Tommy Tompkins In Korea』、韓國國立中央圖書館蔵。ただし、復刻である。

(8) 『The Passing of Korea』、国際日本文化研究センター蔵。同書は東京の国立国会図書館にも所蔵されているが、なぜかこの写真の頁が抜け落ちている。

(9) 『東亜日報』(二〇〇一・七・七〔土〕朝刊) の、명성황후 사진은 존재하지 않는다/신복룡교수의 한국사 새로 보기 〈14〉/명성황후의 초상

という記事で、氏は次のように書いている。

어떤 인물에 대한 추모의 정(情)은 우선 그의 모습을 그리는 데서부터 비롯된다. 남달리 관상과 인상을 중요시하는 한국인들이 얼굴 모습을 그토록 중요시하는 것은 조금도 이상할 것이없다. 그런데 그추모의 감정이 지나쳐 없는 모습을 그리거나 상상이 지나치다면 그것은 추모가 아니라 오히려 고인을 욕되게 하는 것이 된다. 그대표적인 예가 명성황후의초상을 둘러싼 논쟁이다.

(10) 注(9)に同じ。

그러나 이 사진은 결코 명성황후의 사진이 아니다. 그 이유는 첫째 언더우드 여사나 헐버트 박사가 한결같이 이를 왕비의 사진이라고 말하지 않았다는 사실이다. 언더우드 여사는 이 사진을 가리켜, 정장한 귀부인 이라했고 헐버트 박사는 정장한 궁녀라고 설명했다. 고종을 가까이 모신 고문과 황후의 어의(御醫)가 아니라는데 이보다 더 명백한 증언은 없다.

(11) 『韓国併合紀念帖』、日本の国会図書館、ならびに京都府立総合資料館蔵。また勤務校である佛教大学図書館でも所蔵していた。その点、ポピュラーな書籍であったと思われる。

(12) 見出し等は次のとおりである。

○『朝鮮日報』(一九九四(平成6)・八・二三(日))
명성황후 시해추정 칼 발견 일본 구주서 범행자백 문서도

○『朝鮮日報』(一九九五(平成7)・五・一〇(日))
명성황후 시해 목격기 공개
당시 궁내거주 러인 일만행 상세히 기술

○『朝鮮日報』(一九九七(平成9)・一一・一二(水))
명성황후 사진공방 〝머리모양 볼때 황후 틀림없다〟

○『朝鮮日報』(一九九七(平成9)・一一・一九(水))
명성황후 사진논란 〝사진 속 여인 황후복식 아니다〟

○『朝鮮日報』(一九九八(平成10)・二・九(月))
명성황후 사진논쟁, 판가름 단서찾았다
19세기말 가드너 저서 〝조선〟 궁녀 삽화 발견

○『朝鮮日報』(一九九八(平成10)・八・一三(木))
명성황후 논란 사진속 여인은 무명의 〝천주교신자〟?
〝여성 교우〟 설명 프랑스자료 발굴…새 가설 제기

○『東亜日報』(二〇〇一(平成13)・八・一一(土)) 김수경
명성황후 이 모습이 진짜 얼굴?
김준희 前건국대교수 공개 〝1898년 佛언론인 책에 실려〟
함께 실린 대원군—고종 얼굴 실제 사진과 완벽하게 일치

○『東亜日報』(二〇〇一(平成13)・七・七(土)) 신복룡
명성황후 사진은 존재 하지않는다
대원군과 목숨건 권력다툼서 근친아니면 안만나
당시 〝사진 찍히면 혼 빠져나간다〟 인식 카메라 기피
증언자들 〝우아하고 눈빛 초롱〟…교과서 속 인물은 궁녀

(13) シンポンニョン氏はこの中で、定説化していた従来の写真を詳細に調べてみると、背景が操作されていて、人物の体を貼り付けたものだ、としている。その上でその元の写真は、イタリアの外交官・Carlo Rossettiの『Corea e Coreani』に載っていたものだと言う。

이 사진를 정밀히 살펴보면 배경이 조작되었음을 알 수 있다. 즉

원래의 사진에서 몸만 오려내어 배경을 합성한 것이다. 그렇다면 이 사진의 원판은 어떠했을까? 다행히도 그 원판의 사진이 전해지고 있다. 그것이 사진（2）이다. 이 사진은 이탈리아의 외교관인 로제티가 촬영한 것으로 그의 한국 여행기인 〃꼬레아 꼬레아니〃（1904）에 실려 있다. 사진 설명에는 〃정장한 궁중 여인〃 이라고 되어있다.

（14） 本文に先立ち、口絵写真が一一頁にわたって掲載されている。その中で二葉目に大院君の肖像写真と並んで閔妃に関しては、「女王閔妃の筆蹟」のみが掲げられている。京都府立総合資料館蔵。なお、ペリカン社より『明治人による近代朝鮮論　影印叢書7　大院君・閔妃2』（一九九八〔平成10〕・三）が復刻されている。

参考文献

○ＫＢＳビデオ『역사의 라이벌―대원군과　명성황후』１、２（一九九四〔平成6〕・一一・一二・一九放映、영상사업단）
○ＫＢＳビデオ『역사추리』（一九九五〔平成7〕・一〇・七放映、영상사업단）
○朴大憲『西洋人이 본 朝鮮 ― 朝鮮關係　西洋書誌』―Western Books on Korea 1655～1949（一九九六〔平成8〕・一〇、壺山房）
○국립민속박물관『파란 눈에 비친 １００년 전의 한국　코리아 스케치』―The Korea Sketches by the Westerners, 100years ago（二〇〇二〔平成14〕・六、신유문화사）